

40周年を迎えた高岡整志会病院



40周年を迎えた高岡整志会病院を高らかに賛美いたします。

痛みを抱えた患者さんを「待たせるわけにはいかない」基本理念を貫き通され、全身麻酔手術は年間14,000件を超えることコロナ禍を含めて7年間連続しています。

隠れた地方の隠者のような医師を募って、口伝えで全国から患者さんがこられます。

病床数70床、職員数176名、看護体制7対1を堅持し続ける稀有な病院です。

私も35年近くお世話になっています。光栄にも20周年記念誌から投稿させて頂いております。10年単位の成長を私の視点から振り返ってみました。過去の記事を含め掲載いたします。

愛と意志と智慧の結晶（3）

2025年8月

40周年を迎えられ事業承継の道を備えられましたこと真におめでとうございます。

1985年1月に船出をした時の職員数は20名と実弟の税理士・川岸清さんのメンバーでした。その時の光景を想像してみました。「門番は羊飼いに門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名前を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、羊飼いは先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、



ついて行く」この簡潔な言葉の他に思い至らない。

マックス・ウェーバーが「企業の精神的雰囲気は創業者と共に最初に担った人々によって創造される」と言っているように、今日ある我が病院の風土はこの時に生まれた。「痛みに苦しむ患者さんを一刻も早く快癒に導く」そのために全員が結束し寝食を忘れて業務に勤しんだ。専門職の集団でありながら、それに固執することなく、誰も彼もが看護補助者の働きを無意識に果たして院長が手術に専念できる状況を造り出していった。そこで生まれたのが「整志会5S」であった。「入り来る者に安らぎを、出て行く者に平安を」スピードを持って実践したことによって生み出された堅固な風土が根付いたのである。その成果は世の中を驚かせ信じ難い記録を更新し続けた。そのことを実証する強力な場面を私は忘れることができない。後進の人のために残しておきたい記録である。

30周年記念の2015年12月第30回院内研修の場に特別講師として著名な精神科医である医学博士をお招きして院内研修終了後に講演を依頼しました。博士は3時間にわたる院内研修を聞き続けておられた。10分間の休憩を挟んで講壇に立たれ、話し始められて1分もしないうちに沈黙された。時々何かを話そうとされるのですが、次の言葉が出てこない。また沈黙が始まる。このことが数回繰り返され、その後は長い沈黙が続いた。院長が少し助け舟を出されたが沈黙は続いた。そして終わった。職員は大喝采の拍手を送った。

講演後私はその博士から伺ったこと。「私は100回以上講演を頼まれてきたが、今日ほど魂が揺さぶられた日はなかった。講演で話せなかったことを恥じてはいない。神が語らせてくださらなかったのだ。それ程に職員の300の目が輝いていた。あの3時間間の発表の後に疲れを見せず、真剣な眼差しが光っていた。私は言葉を失った。こんなことは初めてであった。院長先生は『この子たちは私の宝だ』とよく言っておられたが、それが真実であることが、今日分かった。素晴らしい日であった。」
今も我が病院の謙虚ながら誇りうる自信に繋がる風土である。次の50年への期待は大きい。

愛と意志と智慧の結晶（2）

2015年12月

30周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

この30年の前半は20世紀、後半は21世紀と世紀を2等分しつつ歴史が大転換を始める時期に相当します。始点の1985年は米国が経済危機を回避するためプラザ合意で為替を円高方向に誘導し、我が国はバブル経済の生成と崩壊に進む起点となった年です。5年後のバブル崩壊は「失われた00年」の言葉を産み出したように日本の経済は低迷し回復することなく今日に至っています。その脱却のため数次にわたる医療改革が実施され、その度毎に民間病院の経営は逆風にさらされ続けてきました。然し、当病院はこのような時代の波に弄されることなく持続的な成長を成し遂げました。その原動力はどこにあったのでしょうか。

院長先生は一貫して二つの不変の問いをもって進んでこられました。一つは「目の前の患者さんをどう救うか」であり、一つは「職員を幸せにするために何をなすべきか」という焦点です。日々痛みと苦痛を背負ってこられる患者さんを診て「医療は緊急事態があつて当たり前」、今ここでの「最良の医療」とは何かの判断を的確になされました。

その発展の軌跡を振り返りますと、13年に及ぶ長い助走期間があり、そこからは三段跳びの驚くべき跳躍となります。

ホップは1998年、40床から70床にするための第2病棟の新築です。全国からこられる患者さんに「待って下さい」という言葉の辛さに堪えられず、医療の緊急性が財務の健全性を越えての英断をされました。これで手術の待ち時間問題が解消され最新の医療への研究も躍進しました。

ステップは2004年の病院機能評価version4への挑戦です。これは総合病院を対象にした制度であり、合格率20%の時代に70床の専門病院がチャレンジできるものとは考えられていませんでしたが、「自分たちが日々、質の高い医療を提供していると思っても自己満足になってはならない。公的な第三者機関による評価は必要である」との院長の考えで受審。職員が一丸となって取り組み、高い評価を受け審査委員を驚かせたことは記憶に新しいことです。その後2009年version 5、2014年更に進化した3rdG:version1の認定へと継続しています。

ジャンプは2006年、第一次の7:1の看護基準への挑戦です。この基準ができる以前から当病院では「最良の医療」の理念のもとに充実した良質の看護を提供しておりましたので準備期間を必要とせず県下第一号で合格しました。

この年には激震的な医療改革が始まり医療界では逆風が更になる中で、再び院長の脳裏に「緊急性のない医療はない」が浮かび、手術室を二つにする第2病棟第2期工事が始まりました。拡大すればそれに相応しい「最良の医療」をしなければとの思いも強くなり、2011年DPC算定病院への挑戦、2013年看護必要度基準が新たに付加された7:1の看護基準をクリアして再び医療界を驚かせました。それは専門病院では認定は絶望的な内容であり多くの専門病院がその基準を断念せざるを得なかったのです。

私はこの軌跡を振り返って思いました。手術件数は19,000症例近くと驚くべき数になっていますが、これは、目標ではありませんでした。「目の前の患者さんをどう救うことができるか」と問い続けた結果であったのです。2006年から始まる医療費削減5カ年計画にも踊らされずひたすら「良質の医療」を目指して自律的な経営で業績は伸び続けました。その成果は常に職員の賃金に反映され、正しい評価を通して賃金水準は県下でトップレベルになっています。

思いは賃金だけに留っていません。院長は親しい者の談話の中で職員を「この子たち」と言われます。それは、雛鳥が親鳥の翼の中で庇護されている様を思わせます。ある手記の中で「職員はまさに一人一人が財産である。大切な一人が辞めるときに特に感じる。本当

に大切な役割をこの子は担っていたことを痛切に感じる。一人の役割は非常に大きく、特に医療は人のネットワークで成り立っていることを痛感する（略）
常に共に戦った職員が私の宝」と記されています。そして夢を語り希望をもって前進する力を一人一人に与えておられます。

患者さんにどう向き合うか？職員の幸せを持続的にどう支え続けるか？この二点を不動の焦点として、その実現の為に「最良の医療」を追求し経営計画が立案されます。この立案に陰ながら大きな力になっておられるのが川岸清さんです。30周年の節目に二人の兄弟愛を留めおきたいと強く心が動きました。又、「脊椎手術はもう怖くない！」が上梓されこの記念に華をそえられます。重ねてお祝いを申し上げます。

愛と意志と智慧の結晶（1）

祝辞

2005年12月

高岡整志会病院 20周年誠にありがとうございます。

日本の社会がまさに疾風怒濤の荒波の中にあった時代において、毎年堅実にして堅固な発展をなされ、地域社会のみならず全国の病み悩める患者さんに多大の貢献をなさってこられましたことは広く周知の事実であります。このような素晴らしい事実を創り出したものは何であるかを考え、三つにまとめました。

それは、愛と意と知恵であります。

まず、根幹にありますのが院長先生の愛に満ちたリーダーシップです。どのような厳しい現場でも、勇猛果敢に率先され道を示される行動力の内に秘めたる先生の愛は至高にして聖書に記されている通りであります。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」一字一句違うところがありません。

私は先生ほど職員を信じる方にお会いしたことがありません。たとえ不真実なものがいても、先生はいつも真実であり続けられ、信頼のリーダーシップを私は体験させていただき感謝しております。

次に、高くて深い専門性を追求する強靱な意志をもっておられます。その高い評価は平成16年（2004年）の病院機能評価の審査結果において明らかになっておりますが、今日に至るまで全身麻酔手術11,810件の全てにおいて成果をあげられ、患者さんの安全を守り、安心と満足は県内に止まらず全国の患者さんが享受されているところであります。高度に専門化がなされるところでは「精神なき専門人」が多くなりますが、先に述べました先生のあふれる愛に包まれた専門性は、信頼と満足を更に生み出す力となっています。

更に知恵を尽くしたチーム医療を讃美します。先生を尊敬してやまない多くの職員さんに囲まれた場(院)には笑顔が満ち、なごみの花の香りがいつも漂っています。そして、難しい課題に直面したときは、知恵を尽くして互いに教え、論し合い、それぞれの使命を全う

するという風土ができております。院(場)のさわやかさ、心地よいスピード感に患者さんは安堵して、その病を癒しています。また、先生は絆をととても大切にされる方です。

「愛はすべてを完成させるきずなです。」と言われますように、先生の誇られる専門性は愛と意志と知恵の結晶であると存じます。

ご健勝にての更なるご活躍が患者さんのためであることを覚えつつ祈願いたします。

2005年12月

パリ通信・第162号

聖霊降臨祭

6月8日(日)「聖霊降臨祭」(ペンテコス)である。復活祭から50日目、昇天したキリストの霊が地上に降りて来たことを祝うカトリック教徒の祭日だ。この日私はローマにいた。今年2度目のローマで朝から30°を超える真夏日、日陰を歩いても汗だくになった。バチカン宮の西アウレリアの丘を登ったところが宿で、信者や聖職者などが利用している安い宿泊施設だった。炎天下、朝早くからサン・ピエトロ広場へ向かう大勢の人で道が溢れていた。



フランシスコ教皇が4月に死去、新ローマ教皇に選出されたレオ14世のミサを聞きに世界中から集まった人たちで、暑さも長蛇の列も苦にならぬ風だった。道路規制や警備はもとより、各所に赤十字テントが張っており、具合が悪くなったり助けが必要な人の対応をしていた。さすがに1時間以上並ぶ元気はなく、テベレ川を渡って対岸の「洗礼者聖ヨハネ聖堂」(バジリカ・サン・ジョヴァンニ・バッティスタ・デイ・フィオレンティーニ)に入った。16世紀に建立が始まったローマのフィレンツェ人教会である。ローマ中の教会で「聖霊降臨祭」ミサが行われ、大きな鐘が鳴った。



在位中は気にすることもなかったが、フランシスコ教皇からレオ14世教皇に変わり、法王にも人柄があることを実感した。フランシスコ教皇の墓はバチカンに所属する「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂」の中にある。生前からバチカン宮やサン・ピエトロ大聖堂ではなく別館で

ある聖マリアの下に埋葬されることを希望していた。彫刻も絵画も一切なく本当に質素だった。墓石と十字架のみで何の装飾もなく、法王のお墓とはとても思えない。

昨年12月のパリ・ノートルダム大聖堂修復記念祭には敢えて参列をせず、コルシカ島を訪問された。白い法衣だけのことが多く、純金の指輪、派手な金糸刺繍を施した赤い法衣を身につけることは稀で、貧しい人々に寄り添う法王様であった。

新ローマ教皇レオ14世はトランプ大統領とゼレンスキー大統領の仲介を務め、政治的な介入に積極的のようである。身につけている法衣や装飾品も立派で人目を引く豪華さである。267代カトリック教の頂点に立つ教皇であるからその影響力は今なおあるだろう。ウクライナ戦争やガザ紛争、法王の影響で戦争が終わるなら嬉しい。69歳の若い教皇であるからこれからに期待されているようだ。



今回のローマ滞在では期せずしていくつかの墓石見るようになった。

フランシスコ教皇が眠る「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂」にはローマ・バロック芸術の大家ジョヴァンニ・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)家の墓が、(写真左)こちらもとても質素で知らないと思落としそうなところにある。



パ
ンテオンにはラファエロの墓石があり、パンテオンのすぐ側「サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂」にはフラ・アンジェリコ(1395-1455)の墓石がある。(写真右)

そしてその隣にはミケランジェロの「贖い主イエス・キリスト」(通称「ミネルヴァのキリスト」)(1519-1520作)が大きな十字架を持って我々を見守っている。

ローマは真に特別な地だと思った。地下鉄を掘ろうとすると遺跡が出てきて工事は進まない。何世紀も前の芸術家の作品や墓石を見ながら日常のミサが行われる。教会の礼拝堂にはフラ・アンジェリコ、ラファエロの絵、ミケランジェロやベルニーニの彫刻が当然のように置かれている。芸術や価値観が受け継がれていると感じた。



3月7日から7月6日までバルベリーニ美術館で開催中の「カラヴァッジョ展」も見ることができた。25点が展示、ナポリの「聖オルスラの殉教」が最後を飾っていた。早くにチケットを完売しただけあって凄い人だった。随分前に小原先生と一緒に見たマドリッド「テイッセン・ボルネミッサ美術館」所蔵の「アレキサンドリアの聖カテリーナ」(1598年頃)が見れたのは嬉しかったが、教会や修道院を訪ねて一つ一つ丁寧に作品を見る感動はなかった。まとめて多くの作品を見ることができる展覧会は有り難いが、本来あるべきところにある作品が訴える力とは別のように感じた。パリに戻る飛行機は「聖霊降臨ミサ」帰りの人も多く、写真やビデオを繰り返し見ている姿が目をついた。

(古賀順子記、撮影)